

『芭蕉翁絵詞伝』の性格（上）

田 中 道 雄

（一九七七年十月二日受理）

- 一 はじめに
- 二 書 誌
- 三 基本的性格 —— 宗祖の絵伝
- 四 構成と方法 —— 作品で綴る芭蕉伝
- 五 第二部の性格 —— 旅の生涯
- 六 第一部の性格 —— 義と情の人（以上、本号掲載）
- 七 第三部の性格 —— 宗祖の終焉
- 八 絵をめぐる
- 九 制作の過程
- 十 稿本のこと
- 十一 板本のこと
- 十二 むすび

一 はじめに

本稿は、義仲寺の寺宝である蝶夢自筆の『芭蕉翁絵詞伝』について解説し、その性格を明らかにしようとするものである。

京の文人僧である五升庵蝶夢（享保一七—寛政七（一七三二—一七九五））は、絵師狩野正栄に

依頼して芭蕉の生涯を描かしめ、絵詞にはみずから筆を揮って、寛政四年（一七九二）十月十二日、これを義仲寺に奉納した。その趣意は、跋文にも記すとおり、もって芭蕉百回忌追遠事業の一となすところであり、蝶夢畢生の事業であったと思われる。たとえば、百回忌の記念事業でありながら寛政五年を待たず、その前年の忌日に奉納されたのはなぜであろうか。蝶夢は、自筆本完成後直ちにその板本化を図り、翌五年の四月井口菊二の板下浄書、五月には吉田偃武の絵図縮写が終了した。このことから考えると、すべてが当初に立案され、年次計画の下、寛政五年をめざして進行していたとの想像も可能で、自筆本と板本とを合わせて一つとする、その事業の大きさがしのばれるのである。

ところで我々は、すでに二百年近い歳月を経た本書に、芭蕉伝記としていかなる意義を見出せるのであろうか。それはともかくとして、本書の板本が江戸期にかなり広範に流布したこと、引き続き明治以降にもしばしば活字翻刻されたことを思うと、本書が長期にわたって芭蕉伝の代表作とみなされて来た事実だけは、まず認めざるを得ないのである。今試みに、本書の活字翻刻本を次に掲げてみる。（※印には絵図も収める。）

袖珍名著文庫・1 富山房 明治36年

※俳諧叢書・芭蕉翁全集 博文館 大正5年

校訂標註 芭蕉文庫・12 春陽堂 大正14年

新型 名著文庫・6 富山房 大正15年

※日本名著全集・芭蕉全集 同刊行会 昭和4年

※富山房百科文庫・36 富山房 昭和13年

俳諧叢書・日本名著全集が当時の有力な叢書であること、二種の名著文庫がしばしば増刷されたことに注意するなら、昭和初年まで本書に対する高い評価が持続し、俳諧愛好者・一般読書人に深く滲透して行った事実を察し得よう。そして、かような受容史を踏まえる時、現代人の胸底の芭蕉像にも深くかかわるものがある、とする本書への認識が許されることになる。

因みに、富山房刊の三種の翻刻は、すべて幸田露伴の校訂により、露伴の次の解題を伴っていた。

芭蕉翁絵詞伝三巻は、蝶夢、これが文を撰し、至信、これが画を作して成れるものなり。文情飄逸、画意瀟洒、共に能く蕉翁を伝ふるに足るの故を以て、世の蕉翁を景慕するもの、清談の余、雅話の末、説いて蝶夢が絵詞伝に及ぼさざること無し。蓋し蝶夢が蕉翁を尊崇するの情の真なる、意の誠なる、発して其の筆端に溢れ、楮表に満つるあるに因らずんばあらざるなり。其の絵詞伝を撰するに至れる始末の如きは、蝶夢自ら之を記して巻末に付せり。読者就いて覽て、其の存心敦厚のところを知り、併せて絵詞伝の世に稱せらるゝ所以を知るべし。

蝶夢は蓋し塵外の人。京都寺町帰白院の住職なりきといふ。……(中略)……

富山房主人蝶夢の芭蕉翁絵詞伝を新刊するに当り、これを書して以て題す。

明治癸卯一月

幸田露伴

露伴の芭蕉研究および啓発の功は、いまさら饒舌するまでもあるまい。その露伴の極めを得た芭蕉伝の古典として、本書は江湖に迎えられたのであった。

しかるに、かく世に知られた本書も、右の数種の翻刻から、芸艸堂出版部による昭和二十二年刊行の複製本に至るまで、すべて板本を底本としたものであった。蝶夢自筆の原本(以下、板本と区別して原本と称する)が、長く義仲寺を離れ、人々の眼から遠ざかっていたためである。その幻の原本は、義仲寺の昭和再建を機に、ふたたび義仲寺へ帰って来たのである。

二 書 誌

本書の内容は、いうまでもなく芭蕉の伝記である。その詳細な検討の前に、本書の書誌を記しておくことにする。

社団法人義仲寺史蹟保存会蔵。

卷子本 三巻。

寸法 上巻 紙高 三七・八cm 全長 一一八九・一cm

中巻 " 三七・八cm " 一二六三・二cm

下巻 " 三七・九cm " 一五四七・七cm

用紙 鳥の子紙。紙背は金粉蒔地。

巻端 外面は紺地緞子織絹布、岡本保考筆「粟」「津」「文」「庫」の

四字と松葉模様を散らして織り込む。内面は銀切箔散らし金

紙貼り。濃緑色平打紐付き。

題簽 金地茶色横縞模様入りの絹布に、佐竹重威筆で「芭蕉翁絵詞

伝 上(中・下)」と記す。

寸法 上巻 横 五・六cm 縦 二〇・八cm

中巻 横 五・四 cm 縦 二〇・八 cm
 下巻 " 五・五 cm " 二〇・九 cm
 内題 なし。

巻軸 黒檀製。

箱篋 漆溜塗りに金泥文字高蒔絵で「芭蕉翁絵詞伝 三巻」(佐竹重

威筆)と記す内箱、桐作りの外箱による二重箱入。外箱に記す箱書(竹村方壺筆)は次の通り。

蓋の表面

「江州粟津義仲寺什物

芭蕉翁絵詞伝 三巻

外題並箱書記 佐竹入道前書博士甲州前司重威

巻物表紙織入之文字 書博士 甲斐守 保考書

寛政五年癸丑十月

方壺道人源明誌

身の内底面

陸奥素郷 得々 伊賀 呉川 鷺橋 社中

指鴻 黄治 廬中 魚潛 豊後 青容

陶々 近江 月川 播磨 寒鴻 皿茶 菊男

素来 谷水 社中 社中 社由

寛洲 素兄 備前 可也 丹後 百尾 日向 五明

柳美 塘里 備中 李山 白児 可笛

江戸 成美 芦水 文里 木越 社中

上野 素輪 里秋 備後 古声 支百 京都 都雀

遠江 方壺 曾秋 社中 讚岐 芝畔 志診

斗六 美濃 蘭戸 筑前 其両 效枝

是月 飛騨 竹母 風葉 李朝 梅珠

柳也 歌夕 但馬 髭風 魯白

白輅 歩嘯 野弓 蝶醉

参河 木朶 其川 東走 依兮

古帆 伊勢 蘿道 南花 肥後 綺石

詞書 作者・筆者 蝶夢幻阿弥陀仏。

絵 点数 上巻 九葉

中巻 一三葉

下巻 一一葉 計三三葉

筆者 狩野正栄至信。各巻尾に「絵 法橋狩野正栄至信(花

押)」の署名あり。

跋文 寛政四年十月十二日、蝶夢幻阿弥陀仏自跋。

識語 下巻の奥に、「堂主 重厚(花押)」とあり。

以上のごとくであるが、ついでに板本の書誌も記しておこう。

冊子本 大本三冊。

表紙 紺色布目入、「粟」「津」「文」「庫」の四字と松葉模様を散ら

した押形あり。

題簽 中央無辺、褐色。「芭蕉翁絵詞伝 上(中・下)」。

内題 なし。

柱刻 三巻全丁に「芭蕉翁絵詞伝」。巻次・丁付を示さず。

丁数 上巻 遊紙 一丁 本文 二五丁

中巻 " 一丁 " 三〇丁

下巻 " 一丁 " 三一丁

詞書 板下筆者 井口保孝。下巻末に「寛政五年癸丑歳四月 / 湖

南菊二井口保孝必需書(保孝之印)(東籬主人)」の奥書あり。

狩野正栄至信原画を、吉田偃武が縮写。下巻末に「癸丑五月

写為 / 蝶夢師縮狩野正栄原図少有所改定云 田偃武(花押)」

の奥書あり。彩色せず濃淡の二墨を用いる。点数、原本に同

じ。

跋文 原本に同じ。

刊記 「蕉門俳諧書林 井筒屋庄兵衛 橋 屋治兵衛」とあり。寛政五年刊。

板本の制作に際して原本の趣きの再現が配慮されたことは、表紙の色や「粟」「津」「文」「庫」四字の押形にもうかがえ、巻分けも三巻構成を交えていなり。

三 基本的性格 —— 宗祖の絵伝

本書の書籍としての性格を、ここでもう少し掘り下げてみよう。

蝶夢は、『草根発句集』の中で、「この年月ハ、丈六のあみだ仏を彫ませ、芭蕉翁の絵詞伝を書しむ……」と記している。^{註一}寛政四年歳暮吟の前書であるが、ここにいう「芭蕉翁の絵詞伝」は書名ではあるまい。書名は「ばしょうおうえことばでん」と「の」を抜いて読むべきと思われるからである。前書の言い方は、「絵詞伝」という普通名詞に「芭蕉翁の」という限定を加えたのであって、ここに、蝶夢の編纂意図が鮮かに示されている。

「絵詞伝」というのは、鎌倉時代に始まる、絵巻形態の祖師伝について用いられた名称である。絵巻物の詞書を意味する「絵詞」という語がまずあり、それが転じて、「伴大納言絵詞」「蒙古襲来絵詞」のごとく、絵巻を意味するようになる。一方で仏教諸宗諸派の祖師伝の制作が相次ぎ、それが絵巻形態であったので、「法然上人絵伝」「一遍上人絵詞伝」などと称されたのである。「絵伝」といい「絵詞伝」といい、その意味内容は同一であるが、「絵詞伝」の方が、より実態に即した丁寧な用語と言えるであろう。しかしここで何よりも大切なことは、蝶夢がその祖師伝に用いる語を芭蕉伝に与え用いた点である。たまたま絵巻物の芭蕉伝を制作した結果、これに相似た祖師伝の呼称を借りたのではなく、蝶

夢が最初から、芭蕉を祖師とみなし、それに相応しい伝記形態として絵巻物に仕立て、かつ「絵詞伝」と呼んだことを、我々はここで確認しておかねばならない。

蝶夢は、芭蕉について述べる時、

伏ておもふに、祖師芭蕉翁在世のむかしより……。……祖翁の肖像を安置し奉り……。……これミな祖徳のいたすわざなるべし……。

(明和7年・「芭蕉堂供養願文」)

のように、宗祖と仰ぐ気持ちをあらわにするのが常だった。蝶夢は、芭蕉を正風俳諧の祖師とみなしていた。その認識こそ、彼の生涯を芭蕉の崇敬と顕彰に捧げさせる熱情の源泉なのであった。このことを理解するには、蝶夢が時宗系の浄土僧であった事実^{註二}に、充分注意を払う必要がある。蝶夢は、あたかもその信仰において宗祖を仰ぐ態度で芭蕉を仰ぎ見ようとし、同時に、蕉風俳諧を己が仏道にも及び得る精神性濃い文芸と把握していた。時宗や浄土宗の念仏宗教団においては、宗祖への尊崇回帰の念がことに強いとされるが、蝶夢は、一遍や法然の行状をしのぶと等しく、芭蕉の求道の生涯を追慕したのである。^{註三}ここに仏者蝶夢に独特の芭蕉観が存するのであり、蝶夢が中世の諸作品にならって、芭蕉伝を祖師伝形態に仕上げようとしたことは疑いない。このことは、本書の基本的性格として銘記しなければならぬ。

四 構成と方法 —— 作品で綴る芭蕉伝

ここで本書の内容検討に移るわけであるが、まずその手法面から眺めてみることにする。

本書を通読して得られる印象は、芭蕉の発句が多数挿入され、文章構成の単位区分は多くその発句を区切りとし、内容もその発句を中心に交

化展開して行く、このような形式をとるということである。したがって、発句一句を含むそれぞれの段は、文章が長い場合は句を伴う俳文、短い場合は前書を伴う発句、といった趣きになる。ただし、基本的にこのような形式をとらぬ部分が二箇所ある。すなわち冒頭と末尾で、芭蕉の出自と出奔までを述べる部分と臨終・葬送を描く部分に当る。この二部分が芭蕉の発句を含み得ぬのは当然であるが、各々を一段として見るなら、いずれも中間部分における各一段よりかなり長く、蝶夢がとくに力を注いだ部分と想像される。今仮に、発句中心にまとめられた諸段（つまり全体の大部分を占める中間部分）を一括して第二部、冒頭部・末尾部をそれぞれ第一部・第三部と呼ぶことにしよう。本書の構成は、このように考えることができる。

次に、第二部について、その方法的特色を確かめることにする。この部分を通読する我々は、既に記憶ある芭蕉の俳文や紀行に次々と出会う思いを抱く。文体は勿論、措辞までも然りなのである。そこでわずかでも検討を加えると、いずれもの段が芭蕉作品を下敷きにしており、それを蝶夢が、あたかも自らの文のごとくに改変したものであることが明らかになってくる。今筆者は、蝶夢が自らの文のごとく改変したと書いたが、蝶夢の本意が、不特定の伝記作者に芭蕉の生涯を語らせる形をとる——つまり第三者の叙述視点に立って資料作品の叙述形式を統一することにあつたのは言うまでもない。実例について見るなら、たとえば奥羽に旅立つ部分が、

立そむる霞のそらに白川の関こえむと、そぞろ神の物につき侍て心をくるはせば、とるものも手につかず、もゝひきの破れをつゞり、笠の緒つけかへて、松島の月まづ心にかゝる。曾良ハ常に軒をならべて、薪水の労をたすく。こたび松しま・象瀉の眺、ともにせむことを悦び、且は羈旅の難をいたはらんといふに、めしつれたまふと

や。

とあるのは、『奥の細道』（蝶夢本）の冒頭部から、

……春立る霞の空に白川の関こえんと、そぞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取もの手につかず、もゝ引の破をつゞり、笠の緒付かえて、三里に灸すゆるより、松島の月先心にかゝりて、……

の部分を取り出して一部を削除また改変し（……は改変部分、×××は削除部分）、同じく『奥の細道』日光の条から、

曾良は河合氏にして惣五郎と云へり。芭蕉の下葉に軒をならべて、予が薪水の労をたすく。このたび松しま・象瀉の眺、共にせん事を悦び、且は羈旅の難をいたはらんと、旅立眺、髪を剃て、……

の部分を取り出して同じく削除・改変し、また語を加えたものである。さらに注意深く比較すれば、「予が」が削られ、曾良の語「羈旅の難をいたはらん」に続いて、「といふに、めしつれたまふとや」が付加されたため、芭蕉の文章が、蝶夢の伝聞表現の文章へと見事に変貌する様が見取れるであろう。本書にも勿論、国分山の段（第⑤段）の冒頭部のように、全く蝶夢自身の文章から成る部分もある。しかしそれはきわめて僅少で、ほとんどは芭蕉作品等に依拠した文章である。この事実はまだ本書の本質的性格として認めねばならず、むしろそこに蝶夢の積極的な意図を見出すべきであろう。

蝶夢は、本書の跋で進んでこのことに触れ、こう述べている。

その詞は、翁のみづから書給ひし、又は其角がものせし終焉記、支考が笈日記の類をもてつゞる。

蝶夢は、芭蕉の作品および「芭蕉翁終焉記」（『枯尾花』収）『笈日記』を素材とし、それを綴り合わせる形で伝記を編もうと、始めから意図したのであった。蝶夢は、自らの文章を用いることを、可能な限り自制した

のである。芭蕉自らの文章をして芭蕉の生涯を語りしめむとする蝶夢の方法に、我々は、古典享受に際して原典を尊重しようとする古学的態度を見るのであるが、それ以上に重要なのは、蝶夢の芭蕉作品に対する、信仰的とも言える愛着尊崇の念ではなからうか。芭蕉の生命をはらむ遺作の語をもつてしか、躍動的な芭蕉伝を成し得ぬ、ましてや私言葉を加えてその純粹を損つてはならぬ、蝶夢はこう考えたのではなからうか。芭蕉作品の名作を鑑賞しつつその生涯を辿る伝記を企てたのであり、板本刊行に際しても、名作中の名文を熟読玩味して進む読み方を読者に期待していたのである。蝶夢等の努力により、芭蕉作品はかなり集成・刊行されてはいたが、未だ普及は不十分な時代である。本書第二部は、芭蕉全集ダイジェスト版といった性格をも備えていた、ということになる

うか。同様のことは第一部・第三部についても言える。この二部の本文もまた、『枯尾花』等の元禄期の伝記資料やその他の古典に依拠するのである。このようなわけで本書は、蝶夢が古典的価値を認めた書物の一章一段を寄せ集め、これを綴り合わせて編んだ芭蕉伝ということになる。そうすると我々にとっては、各段がどの作品のどの部分に依拠するかを確かめることがまず必要にならう。次の第一表は、この各段の出典を明らかにするために作成したものである。御覧いただいた上で、次章に進むことにしよう。(各段には番号と名称とを、各発句と各絵には番号を、私に与えた。)

第一表 『芭蕉翁絵詞伝』 諸段出典一覽表

(上 卷)

段	内 容	本文発句 行数 番号	絵番号	本文の出典 (芭蕉翁文集は 文集と略した)	芭蕉翁発句集 との対照(註)	備 考
①	芭蕉翁の出自。	45 行				
②	家族と出仕のこと。	12 行	一			
③	伊賀上野出奔のこと。	9 行	二			
④	消息を絶つこと。	3 行				
⑤	深川庵に芭蕉を栽えること。	7 行	2	文集・芭蕉を移す詞 (↑板本三日月日記)	○	芭蕉を贈られたのは天和元年春。芭蕉を移す辞は、元禄五年に成る再興の辞。句は天和元年成。
⑥	笠貼りのこと。	15 行	三	文集・笠張の説 (↑和漢文撰)	○	笠張の句文、初稿は天和初年成。
⑦	大巖和尚の本卦占い。	9 行		枯尾花	○	枯尾花はこの段を⑧段の後に置き、板本もこれに従う。
⑧	天和の火難。	5 行	四	〃	○	天和二年十二月の事件。
⑨	貞享元年春、幾霜のの句。	2 行			○	この句、正しくは貞享三年成。
⑩	富士川の捨子。	11 行	五	文集・甲子吟行 (↑泊船集)	○	
⑪	吉野とくくくの清水。	6 行		〃	○	この段、甲子吟行が⑬段の後に置くを改む。

